

大志を育む



令和元年7月 9日

教育委員会だより

No. 29

発行：北広島市教育委員会

「褒めて育てる」を考える

学校教育課 指導主事 高 秀 愛 司

昔から言われている「褒めて育てる」ということについて考えてみたいと思います。相田みつを氏の作品の一つに「点数」という詩があります。この詩の中で、相田みつを氏は、人間は、他人から点数を

点 数

相田みつを

にんげんはねえ 人から点数をつけられるためにこの世に
生れてきたのではないんだよ
にんげんがさき 点数はあと

付けられるためにこの世に生まれてきたのではないと言っています。そして、何よりも人間が先であって、点数(評価)は後から付いてくるとも言っています。ごく当たり前のことです。でも、実際はどうでしょう。私たち教師は、子どもた

ちの長所よりも先に短所や欠点ばかり見つけて、それを直させようとしがちです。

山下 俊彦の言葉



短所を直すにはすごいエネルギーが必要だけれど、長所を伸ばすのは楽である。

山下 俊彦(やました としひこ、1919年7月18日)は、日本の実業家。松下電器産業株式会社(現・パナソニック株式会社)の3代目社長。大阪府出身。大阪市立泉尾工業高等学校卒業。工業高校卒の叩き上げで、末席の取締役から異例の大抜擢を受けて社長に就任した。

欠点などそう簡単に直せるものではありません。そんな欠点をいくつ探したところで、どうにもなりません。長所を見つけ出してやることの方がずっと大切です。そうすれば、子どもたちは、その長所を頼りにしながら、きっと伸びていきます。子どもたちは勿論、大人だって案外自分の長所はわからないものです。その子どもの長所を見つけ出し、いいなぁと感激し、心から褒めてやるのが、教師の役割です。(何でもかんでも褒めるパフォーマンスは、逆に子どもは本能的にその教師の厭らしさを嗅ぎつけて嫌いになる)

先日亡くなった陸上の小出義雄監督は、シドニーオリンピックの女子マラソンで金メダルをとった高橋尚子選手を育てましたが、小出監督の「褒める指導法」が、当時評判になりました。監督は、出会いから高橋選手を褒めたそうです。「おまえ、いい脚をしている。くるぶしから下が特にいい。いいキックしている」そして、その後も、「世界一になれる。絶対になれる」と言い続けたそうです。「くるぶしから下」を褒める監督のセンス、ここに「褒めて育てる」秘訣があると思います。本人も気づいていない長所を発見し、具体的に褒めています。このように毎日褒められて、伸びないわけがありません。

皆さんは、学級の子どもたち一人ひとりの長所を全部言えるでしょうか。また、今日一日で全員の子と会話した内容をすらすらと思いだせますか。「一人ひとりを大事にする」「子どもに寄り添う」「子ども第一」「子どもの側に立つ」ということに拘って教育活動を進めたいものです。

西部地区の小中一貫教育の取り組みについて

(西部中学校:鈴木善則)

西部地区の一貫教育の目的

- ・スローガン 「子どもの夢や未来をみんなで育てよう」「すべては西部の子どものために」
- ・目指す子ども像 「心豊かに 大志をいだき たくましく生きる子ども」



「西部の一貫」とは...「西部の子どもたちが、夢を叶えたり、よりよく未来を生きていくために、小中の教員が協力して子どもたちに生きる力を育てるための教育プログラム」

西部地区の特徴

- ・学校が隣接しているよさを生かせること
- ・西部CS(西部コミュニティ・スクール)の枠組みの中で実施していること。



「家庭・地域・学校をつないでいる西部CSの枠組みの中で、特に学校間でできることを模索し、取り組んでいること」

西部地区での小・中学校での取り組み内容の中から...

(1) 学びをつなぐ...学力・体力の向上を図る連続した学習活動

(2) 大志をつなぐ...大志学(キャリア教育の充実)

(3) 人と人をつなぐ...~児童・生徒、教職員間、地域との交流活動の充実~

(1)~(3)には具体的な内容がありますが、ここでは(3)の に絞って紹介したいと思います。
小中合同研修...年4回の小中一貫会議の実施で一貫の推進状況を協議。
教職員体育研修...小中交流会の際に、小中教員の親睦を図る目的で実施。
生徒指導事案交流の実施...毎月の生徒指導事例を共有。
中学校作品展の実施...文化的な交流を目的。壁新聞展と貼り絵展。
小中合同学習...小6中3防災訓練 小5中2合同体力テスト 小4中1地域清掃
あいさつ運動...児童会と生徒会の合同活動。
白樺高等養護学校との連携学習...特別支援学級で実施。

小5中2合同体力テスト(令和元年6月20日実施)

今年度で4年目を迎える小中合同の体力テスト。対象は小5と中2。今年は当時5年生だった生徒が中学2年になる、初めての代となりました。3年前と同様、今回も本校の齋藤達也教諭が指導を行い、パワーポジション(最もよく力を出せる構え)からの身体の使い方を指導し、反復横跳びや立ち幅跳びの指導、シャトルランを一緒に行い、小学生は記録(回数)の向上を、中学生にはリーダーシップを発揮しながら、小学生への指導を含めて、個々の技術や記録の向上を目指しました。

小学生は必死に上達しようと、中学生はどのようにしたら上手くコツを伝授できるかを、仲間と共に考えながら、献身的な指導で「地域の中の先輩」としての力を発揮してくれました。当時5年生で現在中学2年生の生徒たちの感想は...

児童の動きを見ながらの指導



この小学生の真剣な眼差しが、また次の「西部」を創っていくことになります...

- ・「教えられる側」から「教える側」に変わって改めて先輩としての気配りや「楽しんでいるかな？」等いろいろなことを考えなければいけなかったので少し大変でした。しかし、大変だったことよりも5年生が楽しんでくれたならこの交流は大成功だと思いました。
- ・コミュニケーションをとるのが難しかったが、これを続けていくことは楽しいし、こういうふれあいはいいことだと思う。
- ・5年生の時はすごく優しく教えてもらって、中2になって人に何かを教えるのは難しかった。
- ・小5の時、中学生は怖かったので今年度は「怖いんだろうな」と思いながら優しく接していました。
- ・自分が小5だったら、どんな風に接されたら嬉しいか、相手の事を考えて接しました。

人と人をつなぐ大切さを
感じてくれたようです。

常に打ち合わせをしながら

さいごに...

- ・今年度スタート時のコーディネーター会議(小中代表者会議)の中や、各校での教師側の小中一貫教育についての理解及び意識が高まっているように感じている。西部の子供たちの為に「何かをやってみよう!」というスタンスを忘れないでいきたいと考えている。

